女川町の避難所では、災害派遣された自衛隊のかたがたが支援物資の荷下ろしを手伝ってくれた。

全国からの支援の輪が、復興を後押しする

組合員や地域の人びとのために事業復興を急ぐ、みやぎ生協。
それを後押ししているのが、全国の生協からの支援の輪だ。
食料・日用品など支援物資の提供だけでなく、店舗・宅配事業への人員派遣など、
幅広い分野で支援が行なわれている。

支援物資の輸送に全国から集まった生協の配送車・職員が活躍

県からの要請により、みやぎ生協では津波の被害を受けた東松島市と女川町の避難所への、食事（おにぎりや果物など3、500人分）や支援物資の配送（毎日）を受託。この業務を、全国から支援に入った生協の配送車が代行している。

3月21日、女川町の避難所に食事を運ぶコープさっぽろの配送車に同乗した。ハンドルを握るのは、小樽センター・営業部（組合員拡大）担当の佐藤辰巳さん。支援活動は6日目だが、この間は物流センターでの支援物資の仕分けや各支部への支援物資輸送が主で、被災地という印象は薄かったという。しかし女川町に入って目に飛び込んできた光景に、取材者ともども思わず言葉を失った。また避難所の壁には、親族の安否を尋ねる紙が一面に張り出されており、今回の津波被害の大きさを物語っている。佐藤さんは帰路、次のように話してくれた。

「支援に入られた全国の生協職員には、ぜひ津波被災地を見てほしいと思います。また今回、みやぎ生協で支援活動に参加できて、あらためて、災害などが発生したときに地域に貢献できる活動ができる生協って、本当にいいなと思いました。被災者の皆さんは今、とても厳しいときだと思いますが、生協や世界中の人たちが支援の手を差し伸べています。そのことを、ぜひ前向きに捉えてもらって、1日も早く復興していただきたいと思います。それが亡くなられた人への供養でもあると思います。北海道南西沖地震

コープさっぽろ・小樽センター
営業部 担当　佐藤辰巳さん

津波被害を受けた女川町の様子。

虹の丘店と、支援に入っているコープこうべの配送車。

（1993年）で津波により壊滅的な被害を受けた奥尻島も、現在では復興しています」

なお、全国から支援に入っている各生協の配送車や宅配事業職員は、このほかにも、「お見舞い活動」などで力を発揮している。

コープこうべ職員たちが店舗の復旧をバックアップ

コープこうべでは震災2日後の3月13日に、いち早く先遣隊3人をみやぎ生協へ派遣。その後、店舗支援などを行なった支援チーム第一陣22人に代わり、20日夜には第二陣の20人が到着している。22日に取材した虹の丘店（P.3参照）でも、出勤できないパート職員に代わって店の営業を支援しているコープこうべ職員の姿があった。

虹の丘店で人員整理に当たる、コープこうべ・店舗事業部の橋本修さん。

開店直後、100人ほどの行列の最後尾で整理・誘導をしていた、店舗事業部、生鮮・サービス改革の橋本修（はしもとおさむ）さんは、「深刻な津波の被害を受けた沿岸部のお店に比べ、こちらのお店の被害が少なかったのは何よりだったと思います。ただし生鮮品の入荷はまだ回復していません。早くお店が通常に戻れるよう、私たちも品出しや清掃など、できる限りのことをさせていただきます」と力強く話してくれた。

なおコープこうべでは、4月中旬まで1週間サイクルで職員をみやぎ生協に派遣し、その復興支援に当たっている。

待望の燃料支援「灯油」を全国の生協職員がリレー

3月20日朝9時、みやぎ生協が日本生協連を通して全国の生協に支援要請を出していた燃料のうち、「灯油」がコープこうべから到着。灯油は、電力やガスなどの復旧が遅れ、まだまだ寒い日が続くこの地では必需品だ。またガソリン・軽油などの燃料は、店舗職員の足を確保する（＝営業を続ける）ため、宅配での「お見舞い活動」や避難所への支援物資輸送などにも欠かせないものだ。

届いた灯油は、配達を容易にするために18リットルの灯油缶に入れられ（計555本、総量10キロリットル）、コンテナで納品。しかし、ここに思わぬハードルがあった。555本もの灯油缶はコンテナから外に出すだけでも結構な重労働。これには、みやぎ生協の職員に加え、コープさっぽろ、東海コープ事業連合、コープぎふ、日本生協連など総勢約20人でも30分以上かかり、みんな汗だくになっていた（写真左）。

荷下ろしが終わった灯油は、すぐに共同購入の配送車に積み替えられ、到着を待ち望んでいるメンバー（組合員）宅へと次々に出発していった。その後も全国各地から各種の燃料支援が、みやぎ生協に届けられている。